

丹波



亀岡、南丹、京丹波2市1町を含む丹波山地からは、2種類の良質な砥石が産出する。

一つはカンナやノミの研磨、日本刀の研ぎなどに不可欠な合せ砥で、かつては高雄や愛宕山周辺から広く産出したが、現在は亀岡市東本梅町で小規模に採掘されているにとどまる。

淡黄褐色、灰色などの色合いをもつ粘土質岩で、名前は「砥石型珪質頁岩」と呼ばれる。刃物を研ぐ水晶粒子の粒径は2〜3μと細かい。一説には現在の黄砂のように偏西風で運ばれ、当時の大陸から数千キロも離れた深海底に堆積したものと考えられている。

もう二種は青砥で、以前

丹波山地の砥石から



京都教育大名誉教授

井本 伸廣

に亀岡市宮前町神前周辺で採掘されていた。暗緑色の泥岩で、合せ砥に比べればややきめが粗く、放散虫化石を含む。包丁の研ぎに適する。地質時代は、地層に含まれる化石で分かる。

合せ砥には、コノドントというU型に満たない楕円形の微化石が含まれており、約2億4千万年前の中生代

の層に属する。厚さ5〜6mmの硬い珪質層と厚さ数mmの粘土質薄層の繰り返しになる。珪質層は主に放散虫という0.1〜0.2mm大で、シリカの殻をもつプランクトンの遺骸が無数に集まってできている。かつて火打石に使われたほどに硬い。現在の太平洋やインド洋の

三疊紀前期に堆積したことが判明している。青砥は放散虫化石によって1億5千万年前のジュラ紀後期に、合せ砥に比べればやや陸地に近い海底に堆積していたらしい。

合せ砥と青砥の間には、厚さ50μにわたり、層状チャートが挟まれている。層

海底には、赤道に沿って、こうしたプランクトンの遺骸が堆積し、「放散虫軟泥」を形成している。

三疊紀からジュラ紀にかけて、古太平洋の海底では、合せ砥層を乗せた海洋プレートが南東から北西に向けて1年に数cmの速度で移動していた。この海洋プレートが、古太平洋の赤道海域にさしかかり、ゆっくり通

天橋立名物

天橋立を贈ります 神話の節子司

おみやげ・お祝い・仏事の引出物に

1包6ヶ入 950円
宅配便 近畿地方当日夕方配達可

まつなみ

宮津市天橋立二本松
☎0772-46-2753
http://www.matunami.co.jp



大阪中ノ島公園「近藤正(亀岡油絵懇話会)」

1908年、京都市生まれ。京都大学大学院理学研究科修了。理学博士。京都教育大教授、学長を歴任。専門は地質学。著書に「京都府謎解き散歩」「新京都五億年の旅」など。南丹市のるり渓資料館などで毎年、特別授業を続ける。亀岡市在住。

「大阪中ノ島公園」近藤正(亀岡油絵懇話会)

し、下位から順に、合せ砥・層状チャート・青砥が重なる三層構造が成立した。こうした三つ重ねの地層

このところ中国大陸から飛散するPM2.5による大気汚染が懸念されている。こうした折に、2億4千万年前にパンゲア大陸から飛来した風塵に起原をもつとみられる丹波の合せ砥について、思いを巡らせることで、人のくらしと自然の営みのかかわりに、目を向ける契機になればと願う。

過する間に、合せ砥層の上に放散虫軟泥が降り積もり、やがて層状チャート層へと変化をとげていった。

海洋プレートの移動につれ、層状チャート層のさらに上位には、後に青砥に変化する均質な泥岩層が堆積

を頂いた海洋プレートは、ジュラ紀後期の頃には当時のパンゲア大陸の東縁に到達した。海溝において地球内部へと沈み込む過程で、砂岩や不均質な泥岩の地層と合体し、その後隆起を繰り返して陸化していった。一連の地層の重なりは、保津峽壁石をはじめ、丹波山地のいくつかの地点で確かめることができる。

丹波総局
〒621-0805
亀岡市安町釜ヶ前
代表 0771 (22) 3515
FAX 0771 (22) 3517
tanba@mb.kyo-to-np.co.jp